

## 【ピリピの4つの分類（テーマ）】～与えることの喜び～

今、世の中では様々な問題が起きていますが、あなたはそれを本当に知って理解し「共感」していますか？「大変そうだな」と理解し「かわいそうだな」と共感しているかもしれません。でもそれを「分け合って」いるのでしょうか。ピリピには4つの分類（テーマ）がありました。

- ・ 試練の中の喜び (1:1-30)
- ・ 奉仕の中の喜び (2:1-30)
- ・ 信じることの喜び (3:1-21)
- ・ 与えることの喜び (4:1-23)

「与える」というと「チャリティー」「慈善活動」そう言った言葉もありますが、「慈悲」は神様が与えるものであり人間が与えるものではありません。私たちはその人と共に歩んで解決していくので「慈悲」ではなく「供え」なのです。人が慈悲で与えると相手は弱者から抜け出すことができなくなります。ピリピ書の中で最後に私たちにパウロが伝えているのは「人と向き合う時にどのように共感しているのか」ということなのです。

こんな例え話があります。金持ちが使用人を雇っていました。この使用人は熱心なクリスチャンでした。ある時金持ちが尋ねます。「おまえはクリスチャンなのになぜそんなに苦しい生活をしているのか。そんな生活はやめて自分みたいに生きてはどうだ。」すると使用人は「鹿狩り」を例えにして答えました。「2頭の鹿がいて、1頭はせしめてもう1頭は逃げた。あなたならどちらを追いかけますか」金持ちの主人が「逃げたほうだ」と答えると使用人は「私がたくさん試練にあっているのは生きていて逃げているからで、あなたは死んでいるから放っておかれているのだ」と答えたのです。ピリピ書はまさにこの使用人の生き方です。

## 【収支を償わせて余りある霊的祝福】

パウロは様々な難を通してこの御言葉に出会っています。そして大好きなピリピの人に手紙を送ったのです。

「それにしても、あなたがたは、よく私と困難を分け合ってくれました。」(ピリ4：14)

パウロが投獄されて苦しい時に、その支えになっていたのは自分の心をはかっている存在がいたということでした。そしてそれをしたのはこのピリピの人々だけでした。「私は贈り物を求めているではありません。私のほしいのは、あなたがたの収支を償わせて余りある霊的祝福なのです。」(ピリ4：17) ピリピが収支を償わせて余りある霊的祝福を受けたのは「困難を分け合って補った」からでした。献金はとても大切なものです。なぜならその人の人生がかかっているからです。献金とは神様との約束行為でした。だから昔は収穫した作物でしたが今はお金になりました。作物なら私たちは「与えられてもの」だと思います。しかしそれがお金になった途端に「自分の手柄」になってしまい感謝することが難しくなりました。でもだからこそ、神様を本当に感謝しているかを学ばされるのがこの御言葉です。パウロは自分にしてくれこれに対して嬉しいと言っているのではなく、ピリピの人々が自分に喜んでしてくれたことにより神様から「絶対に祝福されるからうれしい」と言っているのです。だから「その生き方を保て」と伝えているのです。神様は傷みを知っている人が同じ傷みの中にある人を助けようとするときに祝福をもたらす、それをする行為が「キリストにしたこと」だと言っています。収支を償わせて余りある霊的祝福は経済的なものみならず、あなたの環境を整えるのです。神様に捧げることが信仰の土台です。神様の前に私たちがどんな姿勢でいるかが大切です。しなければならぬでやるのでは意味がありません。「心が大切」だと伝えています。上からでもなく慈悲でもなく「共感」です。そこには「その人と一緒に抜け出す」という決意が必要です。ピリピの人たちはパウロが投獄されていた時に自分たちも投獄されているような気持ちになっていたのです。そして一献金の祝福は、もちろん金品を捧げることが目的ではありません。捧げる時に自分の執着を確認できます。だからこそ、神様に捧げるといふ働きを忠実に果たしましょう。また一献金は神の同労者に用いられています。宣教には沢山の戦いと痛みがありますが、その痛みを共に背負い支える事にもつながっています。

パウロが伝えたいことは、「共感」「心の決意」です。同じ痛みを通った人が同じ痛みの中にある人を助ける時に、神様は霊的祝福をもたらします。神様に示されたことを毎回きちんと行いましょう。繰り返になります。どんな姿勢で行っているのかが大切です。これがピリピの教会の心が神に賞賛されるとパウロに喜ばれた理由です。

## 【神に賞賛される供え物】～神の御業と共感～

「私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エバフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおり

であって、神が喜んで受けてくださる供え物です。…」(ピリ4:18～20) 香ばしいかおりとは何でしょう。旧約の時代罪を犯した人が一番最良の羊をいけにえとして燃やした時のおいしさです。愛のある共感、供えが「かおり」です。神が喜ばれるのは物ではなく「あなた自身が聖なる生きた供え物」になることです。そうなるためには神様の道に歩んでいる人や苦難の中にいる人と同じ気持ちになり、同じ環境にいらなくてもいる気持ちになって神様の愛を伝え、共に働くことが大切です。これは神の使命に立って生きようとする人たちと共に共感していこうとする行為であり、これが「献金」であり「捧げ物」なのです。神様が満たして下さることで神の御業が続いていくのであり、この地にあってこの神の御業が続くためには「共感」が大切です。また19節「キリストにある」とは、イエス・キリストがその人に共感して備えものになったという意味です。つまり、私達もキリストに習う者として、神の使命に立っている人と共感し共に働き、神様の愛を伝える。そういう者には、「キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たして下さい。」(19)と約束されています。神の御業がこの地上であらうためには「共感」が大切です。

## 【パウロの挨拶に込められた意味】

「キリスト・イエスにある聖徒のひとりひとりに、よろしく伝えてください。私といっしょにいる兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。…」(ピリ4:21～23)「キリスト・イエスにある」とは十字架です。イエス・キリストが私たちに共感して供え物となったことを知ってほしいのです。「よろしく」という言葉にもイエス・キリストの十字架が入っています。私たちに「この道を生きて」と言っています。このあと「カイザルの家(ローマ)」という言葉が出てきます。パウロはこのローマの人々によって処刑されたのですが、その後このローマに救いが起こります。

歴史を見るといつの時代も、共感するものの中に裏切りの者がいます。この「共感できない」という罪は自分のために人を傷つけてしまうような行為に至らせます。そして、恐れや不安に追いやられた結果、間違ったことをしてしまうのです。しかし、キリストの心の供えがあればそんな誘惑にあうことはありません。

あなたはパウロの生き方に本当に「共感」できるでしょうか。そしてパウロの生き方はまさに「イエス・キリスト」の生き方です。人々の人生に真剣に向き合い、関わり、伝える…この生き方は確かに大変かもしれない。でもここに共感し、イエス・キリストの恵みが私たちの霊から離れず、そのイエス・キリスト心でいられるようにありたいのです。赦された霊を持っている人は、真の共感をすることができます。

## 【真の共感】～霊的祝福を共に備えるとは？～

ここで時に注意が必要なのは、共感→同情・慈悲ではないという事です。特に今回の「共感」は、神様の使命に立っている人に対して宣教での痛み・環境・心などを自分のことのように理解し、共に背負い、共に働くことであります。自分の通ってきた痛みと重ね合わせて、「可哀そうに…」と同情することではありません。これを取り違えてしまう事がありますが、それは「共感」ではなく「慈悲」です。神様があなたに示した人を支えましょう。余計な手出し、自分の思いで人に寄り添うと、その人が受けるべき霊的祝福を奪い去る事になってしまい兼ねません。ピリ4:8-9を実行する者となりましょう。大切なことは、その人が神からの「霊的祝福」が受けられるように人に共感することです。

## さいごに…

イエスキリストが選んだ道は人を愛しようとするのではなくて自分が人々に姿を見せるという生き方だったのです。聖書は生き様が描かれています。神から語られた御言葉に生きようとした人と、背いて生きた人の生き様が記録されているのです。それが神の言葉として私達に残っています。聖書はイエスキリストの生き様を見せることで私達は学んだのです。パウロは言います。そのイエスキリストに学んだ私の生き方を学んで行いなさい。失敗者だったパウロがもう一度敗者復活してプロテスタントは敗者復活なのです。あなたはどんな状況でもやり直せます。しかし、やり直す人に大事な事は同じ過ちを繰り返さないことです。過ちを犯してしまってもう一度底辺に立って神様の前に悔い改めることを貫くことです。そうすると平和の神が失敗者のあなたに共にいてあなたを祝福して下さることを知ります。